

歴史的機能漂白による関係詞の選択

金杉高雄
太成学院大学
kanasugi@tgu.ac.jp

1. はじめに

現代英語(Present-day English)では関係代名詞の機能を果たすことができるのは *that* 関係代名詞と *wh* 関係代名詞の二種類である。これらの関係代名詞は基本としてある対象を指示する機能を共有している。これらの関係代名詞が歴史的にいかなる過程を経て機能を拡張(extension)し現代に至ったか、現代英語とは機能の面でどのように異なるかを考察すると、多くの興味深い点がある。これらの関係代名詞に存在していることがわかる。また、複雑な歴史的背景を持つ関係代名詞であるが、それらにより構築される現代英語の関係節構文は複数の構文レベルでの拡張を経て出現(emergence)したものである(cf. Bean 1977)。つまり、普遍文法(Universal Grammar)によって、生得的に生成された構文と捉えられる根拠はない。言い換えれば、認知主体が並列文において、起源となる指示代名詞を関係代名詞と再分析(reanalysis)することにより、並列文(parataxis)が構文レベルでの文法化(constructional grammaticalization)を受け、従属節(subordinate clause)の一種、関係節構文へと拡張されて出現したと捉えることができる(cf. Kemmer and Hilpert 2005)。一般的にこのような関係節構文は制限節(restrictive clause)と非制限節(non-restrictive clause)に区別される。

(1) a. I could see that he was wearing a velveteen suit which was full of holes.

(下線部付加) (BNC: G3B 1457)

b. Carbon is important and deserves to have its own private branch of chemistry, partly because life chemistry is all carbon-chemistry, and partly because those same properties that make carbon-chemistry suitable for life also make it suitable for industrial processes, such as those of the plastics industry.

(下線部付加) (BNC: H7X 819)

(2) a. Three papers published recently in Science move us a little closer to understanding the basis of the disease, which turns out to be highly complex. (下線部付加) (BNC: A3Y 142)

b. However, if you consider one large modern power station, that would require approximately one thousand windmills each the size of the largest electricity pylons we see these days, and since the best sites for wind energy are on hilltops,...

(下線部付加) (BNC: KRW 86)

(1)、(2)では関係節構文がそれぞれ制限節、非制限節として表されている。そして、(1a,b)では、*a velveteen suit*、*same properties*、(2a,b)では *the basis of the disease*、*one large modern power station* をそれぞれ先行詞と見なすことができる。制限節は重要で基本的な情報を、非制限節では付加的な情報をそれぞれ伝達する機能を担っている。非制限節によって伝達される情報は必ずしも必要ではない。制限節と非制限節とを区別する手立ては音韻的もしくは統語的効果による。すなわち、非制限節はイントネーションにおいて、先行詞と関係代名詞とが分離される。文書ではコンマにより両者が分離されて表現される。また、非常に特徴的な機能として、関係代名詞であり、他の機能をも担う現代英語の *that*、あるいは統語上では関係代名詞が背景化されたゼロパターンは古英語(Old English: OE)期、中英語(Middle English: ME)期そして近代英語(Modern English: ModE)期において制限節と非制限節で共に定着(entrenchment)していた。しかし、現代英語では、この定着が崩れて、ほぼ制限節内においてのみ慣習化(conventionalization)されつつある。

現代英語の関係代名詞は同じ機能を果たす点から捉えてみると、互いに変異体(variation)もし

くは変種と一般的に見なされる。そして、関係節構文という範疇から捉えてみると、制限節と非制限節も互いに変異体となる。言語学ではこの変異体を取り扱う領域に歴史言語学(Historical Linguistics)がある。語彙のレベルのみならず、統語、形態、及び音韻のレベルにおいてそれらの歴史的变化の過程を分析し考察する。言語変化を取り扱う分野は様々であるが、ほかには生成文法(Generative Grammar)と認知言語学(Cognitive Linguistics)がある。生成パラダイムでの枠組みで変異体の取り扱いを見てみると、認知言語学のパラダイムとはその視点が大きく異なっていることがわかる。生成パラダイムでは変異体の取り扱いをある共同体の中で、さらには個々の人間の中においてさえ、異なる種類の文法が共存することを認めることにより、それらの変異体が生成されると捉えられる(cf. Lightfoot (ed.) 2002)。すなわち、二分法的(binary)なパラメータセッティング(parameter setting)が最初に存在してそこから個々の文法に矛盾しない変異体が生成されるという説明である。このパラダイムでは言語変化は生得的に備えつけられているパラメータをリセットすることで、トップダウン式に引き起こると説明される。言語変化の要因はパラメータの設定を変化させることにある。^①しかし、認知言語学のパラダイムでは変異体がある言語、ある共同体に慣習化されるのは、話し手が語彙もしくは構文を談話環境(conversational environment)に応じて、より効率的に構築する認知機構の賜物であると思われている。生成パラダイムとは異なり、変異体が定着するまでそれぞれの段階を経てボトムアップ式に構築されるのである。関係節構文は一見、何の関連性もないと捉えられる並列文を基礎にして用法基盤的(usage-based)に定着し慣習化される。認知言語学の分野では、言語変化が人間に固有の基本的認知能力により動機付けられ、新しい構文の構築では互いに関連付けられる認知的な要素を認めている。ネットワークにより構文間が構築されているのはこのような所以からである。つまり、人間の基本的認知能力による再分析、文法化、漂白化(bleaching)、主体化(subjectification)、拡張等の観点からこれらの変異体を分析することが可能である。上述したように、往々にして、変異体の研究となれば形態と音韻のレベルが中心となるが、ここでは語彙とそれに関わる節もしくは文について人間の認知機構を参照しつつ関係代名詞の機能を歴史語用論(Historical Pragmatics)の視点から考察を行う。焦点となるのは現代英語の関係代名詞が機能的な漂白を受けながら、いかなる歴史の変遷を経て、現代に至ったかに絞られる。

2. 関係節構文の慣習化

現代英語の一般的な関係節構文は、その拡張の起源を OE の時代にまで遡ることができる。^② OE では文と文とを並列に表現することで様々な従属構造の意味を表していた。関係節構文では、例えば、二つの文 S_1 と S_2 が並列されていて、 S_2 の文に S_1 と同じ名詞 N_i が現れていると仮定する。そして、第二段階では S_2 に今度は N_i が現れるのではなく、指示代名詞 P_n が S_1 の N_i を照応する意味機能を備えた語として現れているとする。この P_n がやがて、現代英語の関係代名詞の機能を果たすために再分析されたと推論できる。関係代名詞が定着した時点で次の第三段階へ進む前に、注意すべき概念として「近接性(proximity)」を挙げておく必要がある。^③これは文と文が融合して節のレベルへと拡張する過程を説明するとき重要な概念となる。つまり、関係節構文の構築に向けて先行詞に当たる N_i と指示代名詞 P_n がお互いに意味上、近接性が高いことにより、近接性の原理から話し手が P_n を N_i のすぐ後に置いて発話をするパターンが構築されて、やがて慣習化したと推論できる。この推論の段階が第三段階に相当する構文である。やがて、最後の第四段階として S_2 が S_1 の中に内包されて、「部分(S_2)—全体(S_1)」の関係となる。これが現代英語の関係節構文の歴史的拡張と見なすことができる。この構文間の内包関係を見てみると、構文文法の部分関係のリンク(subpart link)により出現したと捉えることもできる。ゴールドバーグ(Goldberg)は構文文法において構文はそれぞれ、個々に独立して自立性を内在させているとする伝統的な考えには立脚せず、各構文は継承リンクによって結び付けられることにより動機付けられて、ネットワークを形成していると提案している。その構文間の動機付けとなる部分関係のリンクはある構文がそれとは独立して存在する別の構文と「全体—部分」の関係を結ぶことを示す(cf. Goldberg 1995:67-99)。ゴールドバーグの観点から関係節構文を歴史的に振り返って見ると、この構文は並列構文によって動機付けられて存在し部分関係のリンクによって継承されたと発展的に捉えなおすこともできる。

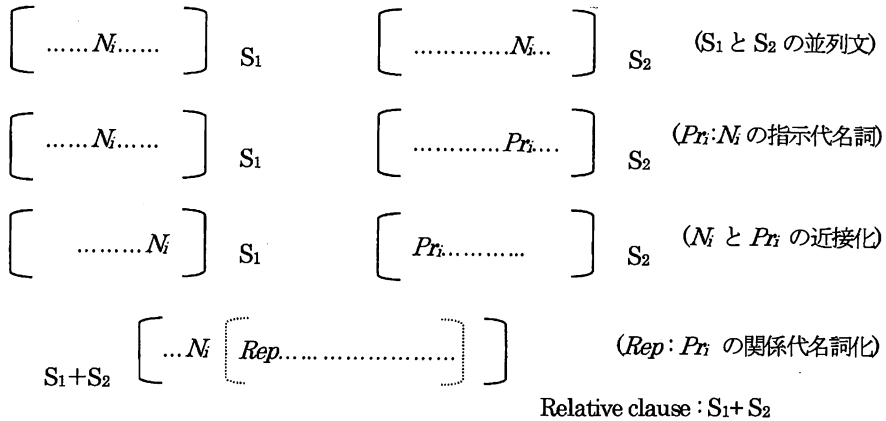


図 1 : 並列文から関係節構文への文法化

図 1 は関係節構文が英語史に出現するまでの拡張過程を模式図に示したもので、並列構造から指示代名詞の再分析の結果、構造的文法化の過程を経て成立した歴史的背景が反映されている。言語変化の動機付けは話し手が事態(event)もしくは語の機能をどのような視点から談話環境に応じて捉えなおすかに依存している。ラネカー(Langacker)(1977:107)は話し手と聞き手の言語変化に関与する重要性という点で両者を比べた場合、話し手側がより重要な存在であると述べている。聞き手は新しく出現した構文もしくは新しい意味を取り入れた語の存在を発見し、それらのある共同体に定着させる基盤になると捉えている。関係節構文の定着も話し手という認知主体による視点の変換による認知機構の賜物であり、認知主体が指示代名詞を関係代名詞として再び評価(evaluation)した結果によるところの変化である。話し手の視点の変換による言語変化は推論の基本的認知能力が人間に備わっていることの証明となる。既存の言語単位を再評価して新しい言語単位を定着させ、慣習化させるこのような言語変化は文法化を受けていることには相違ない。さらに、視点の変換に伴う文法化には、付随的に主体化と呼ばれる認知機構が常に働いている(cf. Langacker 1991)。⁴⁾

2.1 関係代名詞の歴史的背景

OE の関係節構文では無変化の不変化詞(indeclinable particle)もしくは指示代名詞(demonstrative pronoun)が関係代名詞の機能を担っていた。OE では現代英語の *the*, *that*, *those* に相当するものと、*this*, *these* に相当する二通りの指示代名詞が存在していた。注意すべきは前者の指示代名詞の種類である。すなわち、これらの指示代名詞については、並列構文で指示代名詞として機能していた語が関係代名詞として再分析されて定着したのである。関係節構文の起源とされる並列構文で、OE の関係代名詞に相当する機能を担っていた指示代名詞は *se* (主格・男性)、*seo* (主格・女性)、*þæt* (主格・中性)、*þa* (主格・複数)である。⁵⁾ 後者の指示代名詞は *þes* (主格・男性)、*þeos* (主格・女性)、*þis* (主格・中性)、*þas* (主格・複数)である。さらに、現代英語の *that* の起源とされるのは指示代名詞の *þæt* (主格・中性)である(cf. Baker 2003)。特に、OE でのこれらの関係代名詞、指示代名詞は性、数、格に応じて変化していたことが注目される。このような屈折変化の点で OE の他の代表的な無変化の関係詞 *þe* と比較すると、*þe* は性、数、格に応じて変化することはない。このことから *þe* は指示代名詞よりも代名詞性(pronominality)がより乏しいことに気付かされる。⁶⁾ 無変化の関係詞 *þe* は現代英語の関係代名詞 *that* と無変化の点で類似する。また、OE の関係代名詞としてのストラテジーは主として、3 通り確認されている。すなわち、それらはまず、一番目として指示代名詞が関係代名詞として再分析されていたこと、2 番目は無変化の *þe* が関係詞として、そして 3 番目のストラテジーは上で述べた指示代名詞と不変化詞との融合形である。当然、この融合形では指示代名詞の部分は性、数、格に応じて屈折変化をしていたのである。

- (3) a. Danai Pære ēa, sēo is irnende of norPdaele.
 (the river Don, *which* flows from the north)
 b. Pā bēoð ēadige *De* gehyrað Godes word.
 (They are blessed *who* obey God's word)
 c. Hē lifode mid Pām Gode *Pām De* hē ær Pēowode.
 (He lived with that God *whom* he earlier had served)

Baker (2003:47)

(3a)は指示代名詞が関係代名詞として、(3b)は*De* 関係詞、そして(3c)は指示代名詞と*De* 関係詞との融合形の例である。(3a)の指示代名詞を関係代名詞として慣用化することは同じゲルマン系の現代ドイツ語においても共通に見られるストラテジーである。上で述べたように、並列文が関係節構文の起源であることは(3a)の例で、*sēo* で導入される関係節構文が非制限節となっていることからも推論できる。さらに、並列文起源を彷彿させる次の非制限節の関係節構文(4)を見てみる。

- (4) he gefor mid fired ongean Aristonocuse Paem cyninge, *se* wolde
 he went with army against Aristonocusus the king who wanted
 geagnian him Pa laessan Asiam
 usurp to-himself the lesser Asia
 'then he went with an army against King Aristonocusus, who wanted to usurp Asia Minor'
 (下線部付加)(*Or* 5.4.118.1: Fischer *et al.* 2000:58)

フィッシャー(他)(Fischer *et al.*)(2000)によると(4)の *se* が関係代名詞として捉えられている。しかし、関係代名詞と捉えられてはいるものの、(4)が並列文で *se* が指示代名詞と見なすことも十分に可能となる。関係代名詞が指示代名詞であるかは曖昧な解釈として残されたままである。あるいは、非制限節と捉える方法の他に並列文から関係節構文への過渡的段階であると捉えることもできるとすると、構文レベルの言語変化においても段階性(intersective gradience between syntactic constructions)を設定することが可能となる(cf. Denison 2001)。機能と特徴としては (i) 先行詞が [+ human](人物) / [- human](人物でない)と(ii) 制限節 / 非制限節の両方に慣用化されていた。

2.2 関係詞 *pat* の更新

ME で特徴的な言語変化は OE から受け継いできた屈折変化の消失(loss)である。さらに、OE では屈折変化の影響で語順が一定していなかったが、ME に入ると屈折変化の衰退による影響から語順を固定して文法関係を表すようになる。いわゆる、このような言語変化の結果、統合言語(synthetic language)から、語順の固定化によって文法関係が表される分析言語(analytic language)へと大きく推移する。ME は言語変化の観点からすると、大きな激動の時代である。OE から踏襲されてきた関係代名詞のストラテジーについてもかなり変動し、特徴的な機能推移が見られる。すなわち、(i) OE で指示代名詞を関係代名詞と再分析するストラテジーは一度、定着したものの、その慣習化されたパターンは中英語初期(Early Middle English: EME)(AD.1100-1300)には使用頻度が抑制されつつ、最終的には完全に消失する、(ii) *De* 関係詞の使用頻度が徐々に低下する、(iii) OE の *pat* と *De* の融合形である *pat* 関係詞が更新(renewal)される、(iv) *wh* 関係代名詞が慣習化される、以上、2通りの機能漂白と2通りの機能拡張がある(cf. Dekeyser 1984, 1986, Rissanen 1997)。英語史上、最も顕著で特徴的な言語変化の一つである *wh* 関係代名詞の慣習化は *that* 関係代名詞との関連から注目に値する。なお、現代英語の *that* 関係代名詞の起源とされる EME の *pat* は指示代名詞、関係副詞、接続詞そして冠詞の機能をも担っており、したがって、*pat* は現代英語の定冠詞 *the* の起源であるともされている(cf. Brinton and Traugott 2005:90)。⁷⁾ 指示代名詞を起源とする関係代名詞が抑制の末、消失することになった要因を推論することはそれほど困難なことではない。その要因と深く関係する言語変化が屈折変化の消失に他ならない。すなわち、指示代名詞起源の関係代名詞は性、数、格に応じて変化し、活用していた。そのような規則として OE の人々

の間にパターン化していた屈折変化のパラダイムが消失することになると、その変化に付随して指示代名詞起源の関係代名詞も屈折変化による活用が抑制され、やがてそれらの関係代名詞も消失するに至ったと推論できる。その消失の更新としてOEから踏襲されてきたもう一つの関係代名詞としてのストラテジーである、*De* 関係詞の使用頻度が必然的に高くなることは自然である。しかし、上述したように *De* 関係詞はやがて使用頻度が低下し、最終的に *De* 関係詞は機能漂白を受ける。(cf. Mustanoja 1960, Dekeyser 1986, Baker 2003)。 *De* 関係詞を更新したのが *þæt* と *De* の融合形である。MEMでは屈折変化が消失されつつあったので *þæt* 関係詞は屈折変化をすることはなかった。さらに、屈折変化の消失により新しい定冠詞 *De* も更新されることとなった。⁽⁹⁾

EMEに入って慣習化された *þæt* 関係詞には非常に興味深い点が存在する。融合形にはOEの指示代名詞 *þæt* (主格・中性)が一部分として含まれているので *þæt* 関係詞には代名詞性が残っていると推論できる。この *þæt* 関係詞が代名詞としての特徴を呈していると判断できる現象としては「前置詞+*þæt* 関係代名詞」の語順が可能であることが指摘できる。この語順は後で述べる *whr* 関係代名詞の場合にも当てはまる。すなわち、「前置詞+*whr* 関係代名詞」の語順は問題がない。この事実から代名詞性の程度に関して '*þæt* 関係代名詞 = *whr* 関係代名詞' と定義できる。そうすると、代名詞性が部分的であれ、*þæt* 関係詞に残されていると考えると「前置詞+*þæt* 関係詞」の語順が可能であると予測できる。しかし、「前置詞+*þæt* 関係詞」の語順は不可能であるので前置詞残留 (preposition stranding) を余儀なくされる (cf. Dekeyser 1986:100)。よって、*þæt* 関係詞は *þæt* 関係代名詞よりも代名詞性に欠ける (cf. Kanasugi 2005)。よって、前置詞残留を義務的にさせている要因としては融合前の無変化関係詞 *De* の内在的特質が根強く *þæt* 関係詞に残存していたと推論できる。ここで、*þæt* 関係詞は当時、その影響を被っていたと言う仮説を立てることができる。⁽⁹⁾

- (5) a. Wolle we sullen Iosep Dis chapmen *þæt* here come?
will we sell Joseph-*OBJ* these merchants-*OBJ* that here come
'Shall we sell Joseph to these merchants that have come here?'

(下線部付加) (*Jacob & J. 118: Fischer et al. 2000:74*)

- b. sum men *þæt* han suche likynge wondren what hem ailen
what them. *DAT.PL* ail. *PL*

"Some men who have such pleasure wonder what ails them."

(下線部付加) (*The Chastising of God's Children 103,15: Harris and Campbell 1995:85*)

- c. swa *þæt* *Dæs* *dæg*es *þe* he *gefeoll* he hæfde...
And so that the day that he fell he had...

(下線部付加) (*Dekeyser 1986:100*)

(5a)の「*OBJ*」は目的格を取っていることが示されている。そして *þæt* は関係代名詞の機能を果たしている。注目すべきは *þæt* の先行詞が *these merchants* と照応している事実から、関係代名詞 *þæt* が「人物」を指示している点である。現代英語では *that* 関係代名詞は「人物」を先行詞として指示しないという非常に強い傾向がある。しかし、この時期では、現代英語とは異なり「人物・非人物」と照合することはごく一般的であった。(5b)の *þæt* も先行詞が *sum men* であることから同じことが言える。また、*PL* は複数形を *DAT.PL* は与格・複数形をそれぞれ表している。(5c)では *þe* が関係副詞の機能を果たしていることは明らかである。その上に、*þe* はMEでは自由に *þæt* と置き換えることが可能であった (*Dekeyser 1986:100*)。そうすると、この事実から *þæt* も関係副詞 *þe* と同じように、時間を表す副詞節を導く機能をも果たしていたと言える。⁽¹⁰⁾ このように、MEの初期になって初めて融合された *þæt* は非常に多くの機能性を有していたことがわかる。

2.2.1 語用論的圧力によるスキーマの消失

同一の語彙がどのような歴史的変遷を経て複数の意味持ち、多くの機能を果たすまでに至ったかを分析し、考察することは重要なことである。なぜならば、その語彙にのみに備わっている特性の動機付けを発見できることが往々にしてあるからである。ある語の多義性や多機能性を考察することは意味論だけでなく、語用論の分野としても非常に大切な作業となる。推論を土台とする再分析や主体化の認知能力はある談話環境の中で適切に遂行されて、言語変化へと結びついている。ある語に意味もしくは機能が新たに定着するためには使用頻度が高まることによって語用論的強化(pragmatic strengthening)が幾度となく繰り返される必要がある。このように、OEからME、ModEを経てPEに至るまで、既存の語彙に新たにある意味もしくはある機能が拡張ないし漂白されるような言語変化は新しい意味と機能が強化され、あるいは抑制されてきたのである。そのような人間の基本的な認知能力の活動を経た結果、今日の現代英語が成り立っていると言うことができる。

話し手・聞き手の推論と再分析により並列構文の指示代名詞から機能が拡張されOEの *se, sea, þæt, þa* 関係代名詞が更新される。一度、定着をし慣習化を果たしたこれらの関係代名詞はOEの末期からMEの初期にかけて、完全に消失をする。関係代名詞という主要な語彙項目が一度、定着していたにも関わらず、すべて崩壊することは歴史的には非常に大きなそてかなり示唆的な言語変化に他ならない。この壮大な言語変化の背後には極めて強力な語用論的圧力(pragmatic pressure)が作用していたに違いない、と推測される。すでに述べたようにその語用論的圧力と考えられるのは屈折変化の消失とその影響による語順の固定化である。OE、ME、ModE、PEの時代を問わず言語はモジュール至上主義の閉じた、自律的な体系ではあり得ない。言語は非常に開かれた動的な認知体系である。各時代における言語変化、例えば壮大な屈折変化の水平化などは生得的なパラメータのリセットによるものではなく、内的及び外的な要因による動的な語用論的圧力によるものである。言い換えると、言語変化はその場(ground)における具体的な言語の使用(usage event)によって引き起こされている。⁽¹⁾ 言語変化も人間を取り巻く談話環境という環境世界に大きく作用され共同体の中に定着する。用法基盤モデルによってボトムアップ的に成立する新しい構文、または構文を成立させている文法は具体的な言語の使用から抽出されたスキーマ(schema)として存在している(cf. Langacker 1991, Kemmer and Barlow 2000)。OEの時代、屈折変化によって文法的意味が確定し、文の意味内容が伝えられていた。すなわち、現代英語と比較すると、当時の複雑な言語体系も同じように慣習化と共に、屈折変化のスキーマとして定着していたのである。言語使用の蓄積により構文のパターンが蓄積される。そして、この場合、その構文パターンの使用頻度が抑制されたことが要因で、当時の複雑な言語体系を掌る屈折変化のスキーマが消失したと仮定する。そうすると、新しい言語体系が慣習化されることに加えてある特定の言語体系が消失する言語変化もやはり、言語の使用頻度に動機付けられた用法基盤モデルによって説明をすることができる。

2.2.2 関係詞 *þat* の多機能性

上で述べたように、屈折変化の消失によって指示代名詞起源の関係代名詞もその変化に付随して消失する。その結果、EMEではもう一つの関係節構築のストラテジーである *De* と *þat* の融合形、*þat* 関係詞の使用頻度が以前よりも増して飛躍的に高くなる。しかし、ここで考えるべきことは *þat* が関係詞としての機能に加えて、従属接続詞、関係副詞、指示形容詞としての機能をも担っていた点である。このように、*þat* がかなりの多機能性を呈していたこと、そして、*þat* が関係詞として以前よりも飛躍的に使用頻度が増していたこと、この二つの要因が、どのような結果を導いたかを推論することは歴史語用論的に非常に意義深いことである。関係詞 *þat* が強化されるとそれだけ、*þat* は機能上の負担を大きくすることは間違いない。そうすると、当時としては可能な限り、*þat* に課せられた複数の機能を軽減しようとする方向と、それに伴って、消失してしまったOEでの関係代名詞のストラテジーに代わるものを更新する試みが始まる。新しい関係代名詞のスキーマを定着させて、慣習化させるために既存の語彙を再分析する認知機構が活性化されるのである。

2.3 *Wh* 疑問代名詞の機能拡張

現代英語の *wh* 関係代名詞は 12-13 世紀頃にかけて英語史に出現する。そして、その起源は OE にまで遡る。疑問代名詞から関係代名詞への機能拡張には約 400 年の時間が必要であった(cf. OED)。OE の *wh* 関係代名詞は疑問代名詞が再分析されて、機能が拡張された結果、定着し、やがて慣習化されたと考えられている(cf. Rissanen 1997, Fischer *et al.* 2000, Baker 2003)。(12) 現代英語の *which* は OE の *hwelc / hwilc / hwylc* に源を發し、*hwā* は現代英語の *who / what* の起源とされている。そして、現代英語の *why* は *hwȳ* を起源として現在に至っているのである。

- (6) a. Eala, hwy is ðis gold adeorcad?
 'Oh, why is this gold tarnished?' (CP 18. 133. 10: Fischer *et al.* 2000:54)
- b. To hwæm locige ic buton to ðæm eaðmodum...?
 to whom look I except to the humble
 'To whom do I look except to the humble...?' (CP 41. 299. 18: *ibid.*)

(6a)は疑問代名詞 *hwy*、現代英語の *why* が使用されて、語順については疑問代名詞がトピックの位置とする文頭に置かれている。この点に関しては現代英語と異なることはない。(6b)では疑問代名詞 *hwæm*、現代英語の *whom* と前置詞 *to* が、前置詞を先頭にして、その次に疑問代名詞が置かれている。OE では疑問代名詞と前置詞が伴う発話の場合必ず、「前置詞+疑問代名詞」の語順となっていた。現代英語の前置詞残留のパターン、例えば、*Who are you looking for?* にあるような前置詞が文末に置かれることはなかったのである。このパターンが現代英語と大きく異なる点である。

- (7) a. Ne meahte hire Iudas .../ sweetole gecypan be ðæm
 nor could her Judas clearly make-known about the
 sigebeame, / on hwylcne se hælend ahafen wære
 victory-tree on which the savior up-raised were
 'Nor could Judas tell her clearly about the victory-tree, [tell her] on which
 [tree] the Savior was raised up.' (EL 8.59: Fischer *et al.* 2000:92)
- b. hwam mai he luue troweliche hwa ne luues his broðer.
 'whom can he love truly, who(ever) does not love his brother.'
 (Wooing Lord 275.18: Fischer *et al.* 2000:93)

(7a)では、*sigebeame* が *hwylcne* の先行詞と捉えられている。なお、(7a)は縮約節(reduced clause)となっているので、*on hwylcne se hælend ahafen wære* (*on which the Savior was raised up*)が動詞 *gecypan* (*make known*)の従属節と捉えることができるが、*gecypan* は縮約されて、背景化されている。OE の初期では従属節は十分に慣習化されていなかったため、(7a)は並列文としての性質が残存している構文と見なすこともできる。(7b)は ME からの例である。関係代名詞 *hwa* は現代英語の関係代名詞 *who* に該当する。そして、*he* が *hwa* よりも先行しているため、先行詞は *he* となっている。しかし、フィッシャー(他)では *hwa* が独立関係代名詞(*free relative*)と捉えられている。しかし、ここでは(7b)の *hwa* は独立関係代名詞としての地位から、より強い節連結(*clause-linkage*)を実現するために厳格な関係代名詞、すなわち独立関係代名詞とは異なって、先行詞の存在を明確に要求する関係代名詞へと機能的に推移する段階を表していると仮定する。独立関係代名詞について、疑問代名詞から関係代名詞への機能拡張について述べておくと、疑問代名詞が間接疑問文で用いられているのが示唆的である。OE の疑問代名詞は独立関係代名詞としての機能を全面的に果たすことから今日の関係代名詞へと推移してきたのである(cf. Fischer *et al.* 2000, Baker 2003)。(13)

OE の疑問代名詞は性・数・格に応じて語尾変化をする。これは指示代名詞にも当てはまることである。主格もしくは道具格等の個々の語尾変化に相当する語が現代英語に継承されている。

Interrogative pronoun

	<i>masculine and feminine</i>	<i>neuter</i>
nominative	hwā 'who'	hwæt 'what'
accusative	hwone, hwæne	hwæt
genitive	hwæs	hwæs
dative	hwām, hwæm	hwām, hwæm
instrumental	hwȳ, hwon	hwȳ, hwon

表 1: 疑問代名詞 *hwā* 'who' の屈折変化

Baker (2003:46)

表 1 は OE の疑問代名詞 *hwā* の語尾変化を表している。表 1 からは性と格に応じて語尾変化していることがわかり、現代英語と文法上の異なる点は性に応じて語尾変化することである。注目すべきは、現代英語の *why* が男性・女性・中性で道具格(instrumental)の *hwȳ* を起源としている点である。さらに、OE の *hwā* が主格・男性または女性で、*who* に、*hwæt* が主格・中性で *what* にそれぞれ起源を発していることがわかる。歴史的にはそもそも、格が共通で文法性の相違のみに基づいて、現代英語の *who* と *what* に分化した言語変化は興味深い点である。それでは、一体、OE の *hwȳ* が現代英語 *why* の起源であることの動機付けは何であろうか。ここでは、それは誘導推論(invited inference)によるものと捉えることにする。よって、具体的・物理的な「手段・方法」から誘導推論により抽象的な「原因・理由」へと拡張したと推論できる。⁽¹⁴⁾ OE での疑問代名詞もしくは疑問副詞は焦点化による文の先頭にこれらの語を置いて表現されていた。ME の *pat* は複数の歴史的变化により機能の多層化(layering)を呈していた。重要なこととして、その多機能性の状態を帯びていた *pat* は OE 以来の指示代名詞を起源とする関係代名詞のストラテジーが消滅してしまった。そうすると、多機能性の状態を帯びていた *pat* は負担軽減のために *wh*-疑問代名詞を関係代名詞へと再分析化をする方向へ急速に推し進める動機付けとなっていたことが推論される。⁽¹⁵⁾

現代英語の *wh*-関係代名詞は 14 世紀の中頃までには完全に慣習化される(cf. Fischer *et al.* 2000)。しかし、関係代名詞の *who* だけは 15 世紀中頃である。さらに注目すべき点は *wh*-関係代名詞がある特定の機能を果たすために ME で主流を成していた *pat* 関係詞を更新したのではないか、という仮説が成り立つことである。ある機能とは前置詞残留を義務的にしていた *pat* 関係節構文においての *pat* の機能である。ME の *pat* 関係詞はすでに述べたように OE の不変化詞 *De* と指示代名詞 *þæt* の融合形で現代英語の *that* の起源とされている。さらに、前置詞残留を義務的にしていたのである(cf. Hopper and Traugott 2003:202)。すなわち、*wh*-関係代名詞が疑問代名詞から再分析される必要性は前置詞残留を義務的ではなく、任意的(optional)にすると求めることもできる(cf. Kanasugi 2005)。前置詞のすぐ後には代名詞性に乏しい *pat* 関係詞を置くことはできなかったのである。そして、「前置詞+*wh*-関係代名詞」の連続は不適応な組み合わせではなかったのである。⁽¹⁶⁾ ここでは、OE の *wh*-疑問代名詞が関係代名詞として再分析された経緯として、(i) OE の指示代名詞起源であった *se* 関係代名詞が機能漂白によって関係代名詞以外の機能を果たすようになったこと、(ii) 「前置詞+*pat* 関係詞」が不適応な語順のために、*pat* 関係詞は *wh*-関係代名詞によって更新されたと言う、これら二通りの動機付けを提案することができる。⁽¹⁷⁾

3. 関係節の連結性

第 1、2 節では関係節構文の慣習化と関係代名詞の機能拡張及びその漂白について原因と結果を分析した。この節では関係代名詞と節連結について考察を試みることにする。OE で関係節構文

が定着、慣習化されるまでの拡張を分析することでわかることは二つの並列文から従属節の一種と捉えることができる関係節構文への節連結である。節連結は構文の拡張の一例として歴史的には注目すべき言語変化である。文法化は次のように定義される。語彙項目(lexical item)の名詞、代名詞等から文法項目(function word)の接続詞、前置詞等への言語変化である。文法化の現象は語彙のレベルに限られることはない。名詞等の主要項目から文法化により接続詞が機能拡張される背景には新しい構文を定着させるための構文レベルにおいて文法化が存在する。この構文レベルの文法化がより活発に認められることが示唆しているのはより豊かな構文のネットワークを構築しようと試みる人間の認知能力がさらに活性化されている事実である。よって、ある言語体系がいかなる歴史的過程を経てより高度な構文のネットワークを定着させているかどうかを判断する目安の一つとして、単文から複文への定着とその慣習化を指摘することができる。このように節と節もしくは文と文との連結、OEの関係節構文の慣習化を例にとると、文と文との連結は英語にのみ慣習化された言語変化でなく、他のアジア、ヨーロッパ、オセアニアのそれぞれの地域にも普遍的に見られる現象である(cf. Croft 1991, Bybee *et al.* 1994)。このような接続詞もしくは従属接続詞の定着に伴う節の連結化現象は文法化の一例として、広く考察の対象となっている。節連結の文法化は歴史語用論の観点からすれば、非常に興味深い言語変化であると言える(cf. Hopper and Traugott 2003)。⁽¹⁹⁾

3.1 関係代名詞の選択

一般的には、現代英語において関係節構文の制限的な談話環境では、関係代名詞 *that* が照応する先行詞が「限定性」、すなわち *the very, the only, the first, the last* を表している場合と *some, any, all* 等の不定代名詞を伴う場合とに限定される強い傾向が存在する。⁽¹⁹⁾ つまり、関係代名詞 *which* は *that* が先行詞として照応しない指示対象を指示するときに選択される。歴史的に振り返ると、関係代名詞、*which* は *that* に課せられた多様な機能を軽減するために慣習化されたと言える。ここで、考えるべきことは *that / this* の対照から *that* は指示詞としての強い指示機能を保持していると言える。⁽²⁰⁾ 関係代名詞 *that* はMEの *Pat* 関係詞にまで遡り、さらにそれは指示詞としての機能を兼ね備えていたのである。そうなると、ある談話環境において話し手が関係代名詞 *that* を選択するのは本質的に備わった強力な指示性によるという推論が成り立つ(cf. Langacker 2001)。これが仮に妥当だとすれば、語用論的圧力の一例と捉えることもできる。現代英語の *that* は多機能性を呈する。関係代名詞の機能を果たすことにおいてもその維持性(persistence)が保たれていると予想できる。つまり、関係代名詞を選択する基準に維持性が根付いているのである(cf. 注(9))。

when a form undergoes grammaticalization from a lexical to a grammatical item, some traces of its original lexical meanings tend to adhere to it, and details of its lexical history may be reflected in constraints on its grammatical distribution. (Hopper and Traugott 2003:96)

関係代名詞の選択は関係節内の連結性の程度に置き換えることができる。すなわち、制限節と非制限節を連結性の観点から新たに捉えなおすと、前者が連結性の程度が高く、後者がその程度が低い節と位置付けることができる(cf.(1)と(2))。連結性が高いほど先行詞の曖昧性が軽減される。連結性が低いほど曖昧性が増大する。制限節では *that* が非制限節では *which* が話し手によって選択される強い傾向が残っている。それは強度な指示性を示す機能が *that* 関係代名詞の中に現代英語にまで維持されていると捉えられるからである。よって、関係節構文においては、曖昧性が増大する非制限節内で先行詞が節もしくは句であれば *that* ではまく *which* が選択の基準となっている。

- (8) a. He has left his home country, which is unfortunate with us.
 b. Sodium, potassium and calcium ions, which are present in, for example, serum samples, swamp the sensor making it very difficult to detect a particular enantiomer of a drug at low concentration. (下線部付加) (BNC: BMK 227)

もし、仮に(8b)で下線部の *which* が近接指示性の強力な *that* に置き換わるならば、話し手によって選択される先行詞は直前の *calcium ions* のみの照応となるはずである(cf. Rissanen1984:422)。

- (9) She had lost three quarters of a stone in weight and found a waist, which encouraged her considerably. (下線部付加) (BNC: AT4 2995)

したがって、(9)において、先行詞が長い要素(heavy element)であればあるほど、関係代名詞 *which* が選択される談話環境であると言える。よって、関係代名詞 *that* の使用頻度は近接性の観点から説明することができる。上で述べたように、関係代名詞 *that* と *which* とを比較すると *that* の指示性が強いということがその内在的な特質として、指摘するに十分である。さらに、近接性に基づく内在的本質である *that* の強い指示性の機能をより明確に示しているのが次の例である。

- (10) and we delivered our message and the churches letter, which they read and gave us satisfactory answers. (下線部付加) (Keayne, *Busin.* 248)

Rissanen(1984:422,425)によると、(10)で曖昧性が増大する非制限節において関係代名詞 *which* の先行詞は *our message and the churches letter* の複数個となっている。しかし、*which* の代わりに関係代名詞 *that* が使用されていると指示対象は *the churches letter* のみに限定される(cf.(8b))。

【 関係代名詞の選択基準 (基本的傾向) 】

- [1] 連結性が高ければそれだけ、統語的距離も短くなり、関係代名詞 *that* が選択される。この要因としては *that* が内在的に保持する近接性に基づく強力な指示力によっている。
- [2] 連結性が低くければそれだけ、統語的距離も長くなり、関係代名詞 *which* が選択される。
- [3] 先行詞が関係代名詞と統語的に離れているのであれば、関係代名詞 *which* が選択される。

- (例) He called a meeting of senior Cabinet members and energy ministers in an attempt to get agreement on the proposed white paper on energy, which has been delayed for more than two months. (下線部付加) (BNC: K5M 10089)

- [1] 及び [2] との関連性を考慮するならば、曖昧性が増大する非制限節において、先行詞が単独の語彙ではなく、節もしくは句のレベルであるならば、関係代名詞 *which* が選択される。

この選択基準は関係代名詞が機能拡張し現在に至るまでの過程と密接に結びつく認知機構である。

3.2 ModE における関係代名詞の分布

Rissanen(1984)では1640年代のアメリカ英語を対象にして関係代名詞の分布を調査している。その調査によると、最も顕著な特徴としては、現代英語の *which* 及び *who* はこの時代にはすでにごく一般的なコミュニティの間では慣習化されていたことである。さらに、重要な点は *which*、*who* が制限節ではなく、非制限節で定着し、かなり圧倒的に用いられていたことである。

spoken language : colloquial は会議での会話、less colloquial は教会でのお説教調の会話
 Keayne, *Busin.*(colloquial), Keayne, *Serm.*(less colloquial), Bradford と Winthrop (written)
 Keayne, *Busin.* : a more colloquial style, which seems to approach the spoken idiom.
 Keayne, *Serm.* : represents markedly formal, slightly archaic sermon style.
 William Bradford : *History of Plymouth Plantation*, years 1637-40 and 1643-44.
 John Winthrop : *Journal*, years 1640-41

Distribution of relative pronouns in four texts of c. 1640

	<i>that_r</i>	<i>which_r</i>	<i>who_r</i>	<i>zero_r</i>	Total
Keayne, <i>Busin.</i>	38 (56)	19 (28)	2 (3)	9 (13)	68 (100)
Keayne, <i>Serm.</i>	54 (84)	3 (5)	-----	7 (11)	64 (100)
Bradford	26 (59)	10 (23)	3 (7)	5 (11)	44 (100)
Winthrop	2 (9)	10 (43)	5 (22)	6 (26)	23(100)
Total	120 (60)	42 (21)	10 (5)	27 (14)	199(100)

表2: 制限節での関係代名詞の分布

	<i>that_{nr}</i>	<i>which_{nr}</i>	<i>who_{nr}</i>	Total
Keayne, <i>Busin.</i>	10 (15)	45 (70)	10 (15)	65 (100)
Keayne, <i>Serm.</i>	4 (17)	16 (70)	3 (13)	23 (100)
Bradford	-----	31 (65)	17 (35)	48 (100)
Winthrop	-----	41 (73)	15 (27)	56 (100)
Total	14 (7)	133 (69)	45 (24)	192 (100)
Total _{r+nr}	134 (34)	175 (45)	55 (14)	391 (100)

表3: 非制限節での関係代名詞の分布

- I. ModE では written language において関係代名詞 *that* の制限節での使用がかなり目立つ。
- II. 非制限節の枠内で見ると、Keayne, *Busin.* と Keayne, *Serm.* を対照させたとき、より、colloquial な Keayne, *Busin.* の方が *that* の使用頻度が高くなっている。言い換えると、関係代名詞 *that* の使用頻度は文体が形式的になるにつれて、より低くなる傾向にある。
- III. 制限節と非制限節をまとめて全体的に見てみると、
 (i) Keayne, *Serm.* (less colloquial) では *that* の使用が 54+4=58 例存在して、全体の 67% を占めている。
 (ii) Keayne, *Busin.* (colloquial) では *which* の使用が 19+45=64 例存在して、全体の 48%、*that* の使用が 38+10=48 例存在して、全体の 36%、*who* は 2+10=12 例存在し 9%、*zero* は 7% と統計的に見ることができる。
- IV. この時期において、特徴的なのは、written language に区分けされている部分である。Bradford と Winthrop では非制限節において関係代名詞 *that* の使用は見られない。関係代名詞 *which* のみの使用となっている。この特徴的な傾向を意味・統語的な観点から考えてみると、節の連結性に関わる現象と捉え直すことができる。Bradford と Winthrop では先行詞が句または節となっている例が圧倒的に多いことが指摘される(Rissanen1984:422)。

関係代名詞 *which* が使用される頻度が高くなると予想されるのは、先行詞と関係代名詞との節連結の連結性が低い談話環境にあるときとなる。このような、認知環境においてはじめて当時、関係代名詞 *which* が確実に定着しつつあったという初期拡張の歴史的な段階を理解することができる。

The distribution of that_{nr} and which_{nr} in various syntactic environments

	Keayne, <i>Busin.</i>		Kyeane, <i>Serm.</i>	
	<i>that</i>	<i>which</i>	<i>that</i>	<i>which</i>
Antecedent clause or VP	----	24	----	4
Rel. pron. + adv. cl.	----	4	----	----
Distanced rel. clause	1	6	----	4
Rel. pron. With prep., or antec. of phrase or two coord. NPs	}	3	2	3
Others		6	3	2
Total	10	45	4	16

表 4：様々な統語環境での非制限節における関係代名詞の分布

さらに、ModE の非制限節における *that* と *which* の分布は他の様々な談話環境すなわち統語環境を総合的に考慮してみると、表 2、3、4 を含めて分かることは制限節と非制限節に関連する節の連結性と内在する強度な指示性が関係代名詞の選択条件に大きな影響を及ぼしていることである。

4. 結語

現代英語の関係代名詞について機能拡張とその漂白の原因と結果について歴史的に考察を試みた。次にそれらの考察を踏まえた上で関係節構文について、関係代名詞の選択と節連結の強度との相互作用を分析した。OE、ME そして ModE の初期では関係代名詞 *which* と *that* は制限節と非制限節の両方において頻度の差はあるけれども、一般的に広く使用されていた。この事実は現代英語では関係代名詞 *that* が制限節に関係代名詞 *which* が主として非制限節に使用されるという強力な傾向とは相容れない現象である。関係代名詞 *that* のこのような機能推移は機能漂白と捉えうる現象である。関係代名詞 *that* の漂白は興味深く、現代英語では、先行詞が人物を表さないのが一般的であるが、ME、ModE の時代では、関係代名詞 *that* の先行詞が人物/非人物の両方を表していたのである。現代英語では、*that* は関係代名詞としての機能以外に指示代名詞、接続詞、関係副詞等の多機能を備えている。機能としては多い部類に入る。機能漂白と拡張に伴って、現代英語では関係代名詞 *who* に先行詞が人物を、*which/that* は人物以外の先行詞を照応する強い傾向がある。しかし、関係代名詞 *that* の先行詞が人物を照応しない、ことが十分に慣習化されたとは言えない。歴史的な観点から関係代名詞 *that* が受けた機能漂白と拡張の過程を考慮すると、現代英語においても未だ、完全に文法化されてはいないと見ることもできる。よって、関係代名詞 *that* が現代以降、より十分な文法化の段階を経るのであれば、*that* の機能漂白が促進されて完全に人物を先行詞として照応しない十二分に文法化された時代を迎えるという仮説を立てることができる。

言語変化の方向性を考えると、「話し言葉 ⇄ 書き言葉」(change from below)と「書き言葉 ⇄ 話し言葉」(change from above) とに分けることができるが、「書き言葉から話し言葉へと影響されて言語変化が定着する」一般的な傾向があるという(personal communication: Labov)。しかし、言語変化はトップダウン的ではなく、ボトムアップ的に成り立つプロセスであるので、変化の順位、方向はまさしく「話し言葉 ⇄ 書き言葉」で、文字通り 'change from below' であると考えられる。

付記 本稿は平成 18 年 1 月 28 日、京都言語学コロキウム(於:京都大学)での口頭発表に基づいて加筆・修正を施したものである。内容についての不備な点はすべて著者の責任にある。発表では、山梨正明先生をはじめ先生方そして院生の方から建設的なコメントをいただきました。心から御礼を申し上げます。

[注]

- (1) 仮に異なる文法の存在によって方言やアクセントの違いによる変異体が生成されると説明が可能であっても、標準語もしくは方言において関係代名詞に様々な変異体が存在することは普遍文法の原理とパラメータセッティングの観点からすると、標準語もしくは方言の同じ領域内でさえ、話し手は関係代名詞を *which* か *that* または背景化によるゼロ関係代名詞によってパラメータを再設定しなおすことになる。しかし、この仮説はあまりにも非現実的(unrealistic)な印象を与える。
- (2) いわゆる従属構文がいかなる過程を経て英語史に現れたのかを説明するために伝統的に受け入れられている原理の一つに並列仮説(Parataxis Hypothesis)と呼ばれているものがある。すなわち、言語が異なっても、普遍的に複雑な従属文はより、単純な並列並置文から拡張されたとする仮説である。関係節構文も並列構文をスターティングポイントとし、歴史的には関係節構文が出現した後の段階で従属文が現れたとされている。したがって、関係代名詞の後に接続詞が出現したことになる。この拡張は多くの言語に共通に見られる(cf. Harris and Campbell 1995: 308-310)。
- (3) 「近接性」の概念は様々な言語現象に関わっている。この概念はメトニミー(metonymy)とも深く関連している。メトニミーは意味変化の中心的な認知機構と認められ、すべての言語に内在する変化の要因と言える。空間的、概念的であれ、指標性(indexicality)に基づいたメトニミーが語彙の変化を掌るのに加えて、関係節構文への拡張過程を見る限り、構造的文法化においてもメトニミーを中心的な認知機構と定めることができる。指示代名詞を近接性との関連で述べるならば、話し手を起点(vantage point)とする空間的近接性の直示性(deixis)である。話し手と対象との距離の近さによって *this/here* もしくは *that/there* の二通りに区別できる(cf. Langacker 1991:245-247)。
- (4) このような主体化に動機付けられた文法化では、例として、現代英語で譲歩節を導く *while* がある。起源はOEの *Pa hwile Pe* に遡る。現代英語に置き換えると *the time that* となる。名詞 *hwile* は「時間」の意味であるが、やがて、*Pa hwile Pe* はひとまとまりの語として再分析され、時間を表す接続詞となる。この段階を経て譲歩を表す多義性を持った現代英語の *while* が英語史に出現する。
- (5) 指示代名詞 *se, sea, þæt, þa* は多義性を呈していた。すなわち、関係代名詞と同時に、関係形容詞、定冠詞、そして従属接続詞及び等位接続詞としての機能をも果たしていた(cf. Rissanen 1997)。
- (6) 現代英語の関係代名詞、*wh* 関係代名詞、例えば *which, who* は人称と性には応じないものの、格に応じて形が変化する。しかし、接続詞、関係副詞等、多機能を呈する現代英語の *that* は関係代名詞としての機能については、格に応じて形が変化することが不可能である。このようなことから *that* 関係代名詞は *which, who* と比較するとその代名詞性は乏しいと捉えることができる。
- (7) 文法化には一方向性(unidirectionality)の仮説がある。Hopper and Traugott (2003) が述べているようにこれは強力な仮説ではなく、傾向として認められるものである。関係詞代名詞 *that* から冠詞 *the* への機能拡張は *that* が冠詞 *the* と比較するとき、より代名詞性を備えていることから、この代名詞から冠詞への推移は一方向性の仮説に沿う変化であると捉えられる。文法化の特徴として認められる現象は様々である。音韻浸食(phonological erosion)もその特徴として数えることができる。指示代名詞 *that* と関係詞代名詞 *that* とでは明らかに後者に音韻浸食が見られる。この現象は人称代名詞の縮約にも当てはまる。なお、文法化の意味的な側面が意味漂白(semantic bleaching)である。
- (8) 古アイスランド語(Old Icelandic: OI)の指示代名詞 *þat* (主格・中性・単数)はOEの *þæt* (主格・中性・単数)と同族であるとされる。MEの初期に現れた *pat* 関係詞もOIと同族である。OEからPEに渡る英語はゲルマン語族に相当する。そして、OIも同じゲルマン語族に相当するので、共通の屈折変化体系と意味は同じで形が異なるが、そのような語彙体系が存在することは当然のことである。
- (9) 内容語(content word)が機能語(function word)に再分析されても、元の内容語の内在的特質が機能語に残存し分布に関して制約を持つことを「維持性」の原理と言う(cf. Labov 1994, Heine 2003, Hopper and Traugott 2003)。維持性の原理と類似した言語変化の認知機構を導入しているのが Bybee *et al* (1994)である。

Since we are claiming that semantic substance evolves in grammaticalization and that the meaning of the source construction determines the subsequent grammatical meaning, we are not surprised to find that certain more specific semantic nuances of the source construction can be retained in certain contexts long after grammaticalization has begun. Bybee *et al* (1994: 15-16)

文化化の結果、出現した構文の文法上の意味はその起源となる構文(source construction)が持つ意味によって決められる。したがって、ある談話環境においては元々の構文に固有な意味が文化化を受けた後でも、新しく出現した構文の中に長く残存している。彼らはこの原理を「意味保有」(semantic retention)と呼んでいる。例えば、彼らは助動詞の *will* と *shall* の交換可能性について論じている。

- (i) Shall I call you a cab?
 (ii) Will I call you a cab?

話し手が一人称の場合、(i)のように、助動詞は *shall* が最も適切である。なぜならば、この質問の内容「(私が)タクシーを呼びましょうか」が話し手である「私」の側に「タクシーを呼ぶ」、何らかの責任が生じていて、聞き手から「タクシーを呼んでも良い」という確認を要求していることから、助動詞 *shall* に残る固有の意味(specific semantic nuances)である、「義務の念」が適応するからである。一方、(ii)では助動詞 *will* がこの談話環境には適合せず、*will* を使用することは不適切になる。なぜならば、*will* は本来、「要求(desire)」を表現する語で、その本来の意味が全面に出ている。(ii)が不適切であるのは自分が自らの要求を確認する自問自答の形になっているからである。

- (10) ME の *pat* は従属接続詞(subordinator)としての機能も果たしていた。この *pat* の機能は OE の指示代名詞 *paet* (主格・中性・単数)を起源に持つ、同じ時代の従属接続詞 *paet* の機能を継承したものである。さらに、この *pat* の綴りが異なる異形として *pet* が存在し、関係代名詞の機能と同様に従属接続詞としての機能も担っていた。従属接続詞の例としては、*on pa gerad pet...* (on the condition that), *pa hwile pet* (the while that = 'while') であり、一般的には *pa hwile pe* が普通である。
- (11) Milory and Milory (1985:345) では言語変化の要因は話し手の言語使用に動機付けられていることが述べている。新しい構文がある共同体に定着をし、やがて慣習化される過程は、言語自体が UG のおかげで、自律的に新しい構文を構築するわけではなく、話し手自身の言語使用の蓄積が新しい構文を出現させると言う：“... it is not languages that innovate; it is speakers that innovate”。
- (12) ME の時期に *wh* 関係代名詞が定着した要因として、社会言語学の立場から見た動機付けがある。Romanie (1980) では英語に *wh* 関係代名詞が導入されたのは外的要因としてのラテン語(*qui / quae / quod*)とフランス語(*qui / que*)による影響であるとする。これに対して Dekeyser (1986), Fischer et al (2000) はこの外的要因によって *wh* 関係代名詞が出現した根拠には賛成ではない。もし、ラテン語もしくはフランス語の影響であれば、社会言語学的に見てラテン語またはフランス語を起源とする関係代名詞が一時的にはあれ出現していたと考えられるが、そのような関係代名詞はない。
- (13) 関係代名詞 *who* が英語史に定着するのは 15 世紀中頃で、他の *wh* 関係代名詞と比較すると極めて遅い(cf. Dekeyser 1984)。疑問代名詞から関係代名詞への機能拡張は再分析によるものである。

- (i) As for other occupants, how would they know who else had lived there? (BNC: CDB 939)
 (ii) But it's a valid question to ask who may later succeed him. (BNC: EB3 377)

(i) と (ii) では疑問代名詞の *who* が現れている。しかし、例えば、これらの *who* は先行詞の *the person* が *know* と *ask* の後にそれぞれ背景化されているとすれば、次のように言い換えることができる。

- (i') As for other occupants, how would they know the person who else had lived there?
 (ii') But it's a valid question to ask the person who may later succeed him.

疑問代名詞が用いられてはいるが、ゼロ先行詞の例と見なせば、*who* は関係代名詞と再分析される。

- (14) 日本語においても「どうしてここまで来たの?」という問いに対して、「理由」を尋ねる問いであれば「大切な用事があったので、ここまで来ました」、もしくは「手段」を尋ねる問いであれば「車でここまで来ました」のように曖昧な解釈が可能である。文のレベルだけで「どうして」を考えてみると多義性を呈しており、「手段」から「理由」の意味へと拡張された例と捉えることもできる。
- (15) 疑問代名詞から関係代名詞への再分析のプロセスは英語に限られた言語変化ではない。この現象はいくつかのゲルマン系、ロマンス系の言語においてもごく普通の拡張プロセスとなっている。
- (16) 不変化詞 *De* は前置詞残留を義務的にする。Hopper and Traugott は次の例を挙げている。

- (i) nyhst ðæm tune ðe se deada man on lið
 next that homestead SUB that dead man in lies
 'next to the homestead that the dead man lies in/next to the homestead
 in which the dead man lies / which the dead man lies in' (c. 880, Orosius 1.1.22.2)
- (ii) *nyhst ðæm tune on ðe se deada man lið
 '* next to the homestead in that the dead man lies' (Hopper and Traugott 2003:202)

OEの *ðe* は現代英語の *that* に相当する語である。これらの関係代名詞は屈折変化をしない点で共通している。また、*ðe* は従属接続詞(補文標識)としての機能も果たす。

- (17) OEの *se* 関係代名詞は指示代名詞からの拡張により慣習化されたので、前置詞残留を義務的にする談話環境を提供しない。OEの *ðe* 関係代名詞よりも *se* 関係代名詞は高い代名詞性を呈している。
- (18) Hopper and Traugott(2003:ch.7)によると、節連結の言語変化は文法化現象として位置付けられる。
- (19) 「指示性」の概念は *wh* 関係代名詞、そして指示代名詞 *this* にも備わっているので関係代名詞 *that* には「限定性」が保有されていると表現した方がよいかもしれない。よって、ここでの「指示性」とは統語上、すぐ直前の先行詞を照応するという意味においてその指示力が強度なことと定義する(cf Langacker 2001)。「限定性」が *that* にのみ存在する動機付けは、A、B、C、Dがあつてその中から「どれでも、いずれか」を指示する場合は *whichever* が妥当なことにある。よって、これとは対照的にA、B、C、Dの中から「どれでも、いずれか」を指示する表現として「限定性」を内的本質とする * *thatever* が存在しないことになる(personal communication:山梨)。
- (20) 指示代名詞及び関係代名詞しいては接続詞 *that* の起源は不変化詞 *ðe* と指示代名詞 *þæt* に遡り、OEより *ðe* 及び *þæt* は共に関係詞としての機能を果たしていた。さらに、照応としては前方照応(anaphora)としての機能を担っていた。これに対して *this* はOEの指示代名詞 *pes* にその起源を有している。この *pes* は後方照応(cataphora)の機能を担っており、さらに *that* とは異なり不変化詞 *ðe* と融合して関係詞の機能を保持するそのような歴史的経緯を持たなかった。よって、現代英語の *this* には強い指示機能が備わっているが関係代名詞としての機能はないことが推論される。

〈 参考文献 〉

- Baker, Peter S 2003. *Introduction to Old English*. Oxford: Blackwell.
- Bean, Marian Callaway 1977. *A Study of the development of word order patterns in Old English in relation to theories of word order change*. Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles.
- Brinton, Laurel J. and Elizabeth Closs Traugott 2005. *Lexicalization and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L., Revere Perkins and William Pagliuca 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, William 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dekeyser, Xavier 1984. "Relativizers in Early Modern English: a dynamic quantitative approach", in Jacek Fisiak (ed.) *Historical Syntax*, pp.61-87, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Dekeyser, Xavier 1986. "Relative markers in the Peterborough Chronicle:1070-1154", *Folia Linguistica Historica* Vol.7, pp. 93-105.
- Denison, David 2001. "Gradience and linguistic change", in Laurel J. Brinton(ed.) *Historical Linguistics 1999: Selected papers from the 14th International Conference on Historical Linguistics, Vancouver, 9-13 August 1999*, pp. 119-144, Amsterdam: John Benjamins.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff 2000. *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions : A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Harris, Alice C. and Lyle Campbell 1995. *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd 2003. "On degrammaticalization" , in Barry J. Blake, Kate Burridge and Jo Taylor (eds.) *Historical Linguistics 2001: Selected papers from the 15th International Conference on Historical Linguistics, Melbourne, 13-17 August 2001*, pp.163-180, Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott 2003 (second edition). *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kanasugi Takao 2005. "A Pragmatic and functional pressure in the pronominalization of relative *that*" , *Paper presented at the 17th International Conference on Historical Linguistics*: Madison, Wisconsin ; United States.
- Kemmer, Suzanne and Martin Hilpert 2005. "Constructional grammaticalization in the make-causative" , *Paper presented at the 17th International Conference on Historical Linguistics*: Madison, Wisconsin ; United States.
- Kemmer, Suzanne and Michael Barlow 2000. "A Usage-based conception of Language" , in Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-Based Models of Language*, pp. vii-xxviii, Stanford: CSLI Publications.
- Labov, William 1994. "The maintenance of meaning" , in William Labov (ed.) *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*, pp. 569-599. Oxford: Basil Blackwell.
- Langacker, Ronald W. 1977. "Syntactic reanalysis" , in Charles N. Li (ed.) *Mechanism of Syntactic Change*, pp. 57-139, Austin: University of Texas Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2001. "What WH Means" , in Alan Cienki, Barbara J. Luka and Michael B. Smith (eds.) *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*, pp.137-152, Stanford: CSLI Publications.
- Lightfoot, David W. (ed.) 2002. *Syntactic Effects of Morphological Change*. Oxford: Oxford University Press.
- Milroy, James and Lesley Milroy 1985. "Linguistic change, social network and speaker innovation" , *Journal of Linguistics* Vol. 21, pp. 339-384.
- Mustanoja, Tauno 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Societé Néophilologique.
- Rissanen, Matti 1984. "The choice of relative pronouns in 17th century American English" , in Jacek Fisiak (ed.) *Historical Syntax*, pp.417-435, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Rissanen, Matti 1997. "Optional THAT with subordinators in Middle English" , in Raymond Hickey and Stanisaw Puppel(eds.) *Language History and Linguistic Modelling: A Festschrift for Jacek Fisiak on His 60th Birthday*, pp. 373-383, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Romaine, Suzanne 1980. "The relative clause marker in Scots English: diffusion, complexity, and style as dimensions of syntactic change" , *Language in Society* Vol. 9, pp. 221-247.
- Simpson, John A.(ed.) 2002. *Oxford English Dictionary: Version 3.0* Oxford: Oxford University Press.
- 山梨正明 2004.『認知言語学原理』東京. くろしお出版.